



熊本県立
高森高校

チーム・ティーチング

英語・体育、国語・日本史 異教科連携の授業で 生徒の意欲を喚起

◎1948年に熊本県立阿蘇高校高森分校・白水分校として発足（のちに合併）。中庸の三徳「知・仁・勇」を基本的な徳目として、真理の探究と心身の鍛練、友愛の心の涵養を目指す。2006～08年度に文部科学省の学力向上拠点形成事業の指定を受け、授業の質、生徒の学習意欲の向上に向けた改革を進めてきた。

設立

1948(昭和23)年

形態

全日制／普通科／共学

生徒数

1学年約35人

11年度進路実績(1月末現在)

4年制大の合格者は、佐賀大1人、徳島大1人、熊本県立大2人、熊本学園大1人。短大・専門学校合格者9人、就職内定者15人。

住所

〒869-1602
熊本県阿蘇郡高森町高森1557

電話

0967-62-0185

Web Site

<http://www.higo.ed.jp/sh/takamorish/>

変革のステップ

背景

◎生徒指導上の課題や慢性的な定員割れに加え、生徒の授業に対する意欲や理解度も低かった

STEP 1

実践

◎授業研究の中心的な取り組みとして、異なる教科の教師によるチーム・ティーチングを取り入れる

STEP 2

成果

◎授業に対する生徒の集中力、理解度、定着度が増す。教科間のつながりを意識する生徒も出てきた

STEP 3

生徒の現状に
合っていないかった授業

漢文の授業で、英語の教師が英文法の構造を説明する。英語の授業に体育の教師が入り、英文のテーマであるジャンクフードについて保健体育の視点から解説を加える――。

熊本県立高森高校では、異なる教科の教師2人によるチーム・ティーチング(TT)を、2006年度から研究授業などで行っている。導入のきっかけは、同年に指定を受けた文部科学省の「学力向上拠点形成事業」だ。現在では遅刻はほぼなく、基本的な生活習慣は定着しているが、当時は生徒指導が大きな課題だった。「地域に根ざした活力ある学校」をスローガンに、服装指導や登校指導の徹底、学校行事や部活動などの充実を図り、学校改革を推進した。

07年度に赴任した教務主任の古閑博昭先生は、赴任当初の様子を次のように振り返る。

「悪ぶっている生徒でも、一人ひとりと接してみると活発で素直な生徒たちでした。当時は生徒と教師の距離が近すぎるために慣れ合ってしまうことが課題で、教師の側が『悪いことは悪い』と明確に言える体制づくりが求められていました」

生徒の学力と授業のレベルが合っていないかったことも課題だった。事業指定時に生徒にアンケートを取ったところ、授業中に私語や居眠り

をする生徒、授業がつまらない、分からないと感じる生徒が、半数以上いることが判明した。

「本校には小・中学校時代に学習に興味を持つ機会を得られないまま高校生になった生徒が多くいます。まずは学びや授業に目を向けさせることが重要でした」（田中一則校長）

テーマは「ジャンクフード」 英語と保健体育のT・Tが実現

T・Tを導入した当初の狙いは、複数の教師が



熊本県立高森高校校長
田中一則 Tanaka Kazunori

教職歴35年。同校に赴任して2年目。「すぐやる、必ずやる、出来るまでやる」



熊本県立高森高校
村上房親 Murakami Fusachika

教職歴10年。同校に赴任して4年目。進路指導
主事。「失敗を恐れずに突き進んでほしい」



熊本県立高森高校
古閑博昭 Koga Hiroaki

教職歴8年。同校に赴任して4年目。教務主任
「自分で自分の限界をつくるな」



熊本県立高森高校
橋本淳 Hashimoto Jun

教職歴7年。同校に赴任して3年目。1学年主任
「過猶不及」

授業に入ることによって、落ち着いて授業を受けられる環境にすることであった。そのため、まずは学級担任がT2として入り、生徒の授業への姿勢を徹底的に指導した。

生徒の授業態度は大きく改善し、学校が落ち着きを取り戻しつつあった07年度、研究主任となった古閑先生を中心に、授業研究の更なる活性化が提議された。小規模校の特性を生かして何か出来ないか……。検討の結果、浮上したのが異なる教科によるT・Tだった。

「本校は担当教師が1人しかない教科が多く、同一教科にこだわっていたのではT・Tは出来ません。そこで、内容が関連する部分で他教科の先生に入ってもらえば、生徒の興味・関心を高められるのではないかと考えました。小規模校のデメリットを逆手に取ったのです」（古閑先生）

07年10月の研究授業週間では、実施した7コマのうち1コマを、異なる教科の教師によるT・Tとした。ここに同校初、英語と保健体育の教師による異色の授業が実現した。英語の「ジャンクフード」をテーマとした単元の授業で、英語科の村上房親先生が本文の解釈を一通り説明した後、保健体育科の上田晃裕先生がペットボトルを持って登場。成分表示を示しながら「君たちはここまで読んでいますか」と注意を促した。授業を企画した村上先生は次のように話す。

「以前から漠然と他教科の先生と一緒に授

業をしたいと考えていました。ジャンクフードが体に良くないということは分かりますが、なぜ悪いのかを科学的に説明することは、英語教師の私には出来ません。専門の先生に深みのある話をしてもらうことで、生徒の関心を授業に向けられるのではないかと思います。そもそも、生徒にとっては、授業中に教師が入れ替わること自体が新鮮です。50分間、集中力が続かない生徒にとってはメリハリがつかまずし、教科横断的な内容のつながり合いを意識しながら授業を聞くことで、理解度や定着度が増したようです」

古文と日本史のつながりから 生徒の関心を「敬語」に向けて

07年度3学期の研究授業は、4コマすべてを教科横断型で実施した。そして、08年度に異教科のT・Tは更なる進化を遂げる。

この年に赴任した国語科の橋本淳先生による古文の授業が、その発端となった。単に生徒の興味を高めるだけでなく、日常生活で使える知識の習得を目指し「敬語」の授業で異教科のT・Tを取り入れたのだ。同校の生徒は6割が就職希望であり、3年生になると面接対策の一環として敬語を学習する。ここでは基礎的な言い回しも出来ない生徒が多かった。橋本先生は、日本史の教師に、古典文学で必ず敬語表現が用い

られる天皇や上皇がどれほどの力を持っていたのかを、歴史の観点から説明してもらった。

「本校には、狭いコミュニティの中で育ったために、敬語を使う機会があまりなかった生徒がいます。そこで、学習にあまり関心がない生徒に対しても強い印象が残せる異教科TTで、敬語の授業を行おうと考えました。科TTで、敬語の授業を行おうと考えました。社会に出たら必ず必要となる敬語の背景を知ること、その重要性に気付いてほしいと考えたのです」(橋本先生)

目の前にいる生徒の課題を踏まえた授業づくりを行うことで、TTは更に効果が増すのだ。

教師全員で異教科TTの可能性を洗い出す

TTはあくまで研究授業の一環として行われてきたが、10年度、これを同校の特色とする方向性が示された。1学期の研究授業で、橋本先生が以前行った古文と日本史のTTを実施。同年に赴任した山本朝昭教頭がこれを見て興味を持ち、授業力向上の目玉に位置付けた。

教師全員にアンケートを取り、教科横断で出来る内容を抽出し、マトリックス化してTTの「教科相関表」を作成(図)。10月に行った公開授業では、家庭科と数学が連携して食品の廃棄率を考慮した購入量を計算する授業や、保健体育と地理が連携して歴代のオリンピック開催国

の歴史や風土を学ぶ授業などを行った。

国語科の橋本先生は英語科の村上先生と組み、文法の授業を行った。現代文、漢文、英文の文法の共通点や相違点を示し、文法の構造を理解させることが目的である。ここでも根底にあるのは、志望理由書や小論文対策、ひいては社会に出てから必要になる日本語力の育成である。

「生徒の志望理由書などを読んでみると、しばしば『私は看護師になるのが夢です』というような文章の『ねじれ』が見られます。正しい文章は『私の夢は看護師になることです』。この間違いに気付くためには主語や述語の概念が必要ですが、文法の構造を理解していない生徒は『ねじれ』という概念すら分かっていません。文章には主語、述語があるという基本的な知識の習得が、本校の生徒にとって切実な課題なのです」(橋本先生)

文法の定着には、村上先生もかねてから課題

図 チーム・ティーチングのための教科相関表(抜粋)

図	国語	地歴・公民	数学	生物・化学	英語	保健体育
国語		敬語(古文)と天皇の地位	学者・寺田寅彦のエッセーを読む	井伏鱒二『山椒魚』とその生態研究	日本語と英語の文構造解析比較(1年・10月)	
地歴・公民	『大鏡』の文面の考察及び平安時代の貴族社会・摂関政治を考える(2年・10月)		為替レートについて(2・3年・11月)	原子爆弾はなぜ落とされたか(ウラン型とプルトニウム型の仕組み)	国際条約の解説と原文の注釈(3年・10月)	スポーツと政治
数学	数学証明の論理と文章展開	ピラミッドと三方の定理・通潤橋と数学			数字を英語で読む時間	人文字を作るために数字がどう活用できるか
生物・化学	金属イオンの定性分析(化学)と文章理解(国語)による実験(3年・10月)	生態的地位(ニッチ)と地形や気候との関係	酸・塩基の定義と濃度(指数)計算及びpHの定義・求め方と対数の数的処理(2年・11月)		ワトソン・クリックの二重らせん構造に関する論文にふれる(2年・11月)	スキヤモンの発育曲線から見たからだの機能の発達(3年・10月)
英語		阿蘇の観光地を英語でガイドする(3年・10月)				英語によるラジオ体操(2年・12月)
保健体育		オリンピック開催都市と歴史・風土・経済の関係について(3年・10月)				
家庭科			食物検定にむけて、食品の質量の比較や食品廃棄率の計算を行う(2年・10月)			

■部分は2010年度実施予定のチーム・ティーチング。TT授業の単位は縦列の教科となる *学校資料を基に編集部で作成

意識を持っていた。

「生徒の中には『E.S.S.』と書く者もいます。『てにをは』の概念すらない生徒もいて、これは単に英語力の問題ではないということを感じていました」

双方の教科が抱える課題が合致する部分を取り上げることで、授業の質も教師の意欲も高まり、教科横断の利点が発揮されている。

「英語と国語にはつながりがある」 生徒の気付きを促す

10月に行った公開授業では、TTにグループ学習を取り入れた。全体指導でそれぞれの言葉の構造を説明した後、生徒は4〜5人のグループになってプリントに取り組み、現代文、漢文、英文の共通点と相違点を話し合った。橋本先生はその狙いを次のように話す。

「現代文、漢文、英文、それぞれの文章の構造の違いに、生徒に自ら気付いてほしいと考え、グループ学習を取り入れました。結果的に生徒から『漢文と英文の構造は』同じなんだ』という声が上がリ、生徒の集中力がぐっと高まる瞬間がありました」

これは、TTをしていった2人の先生が、この授業に手応えを感じた瞬間でもあった。

また、英語科の村上先生が机間巡視を行い、生徒のつまづきを確認していったところ、事前の予想とは違う部分で多くの生徒が勘違いしていることが分かった。村上先生は、グループ学習中にその情報を橋本先生に伝えた。そして、授業後半に説明しようとしていた内容を変え、急ぎよ、生徒がつまづいていた個所の解説に切

り替えることが出来たのである。

TTは、生徒の授業の理解度が深まるだけでなく、内容の定着の観点からも効果的だという。国語の期末考査で、現代文と英文の違い、漢文と英文の相違点・共通点について説明させる問題を出したところ、多くの生徒が正解した。間違えた生徒も、現代文と漢文を逆に捉えていただけで、授業で取り扱った文章が主語、述語、目的語で構成されていることは理解していた。

TT後の生徒への授業アンケートには、「英語と国語は違う教科だと思っていたけれど、つながっている部分もあることが分かった」という感想が寄せられた。TTが、学びの共通性への気付きや多面的なものの見方につながっていることがうかがえる。

教師の指導力向上につながる 教科横断型のTT

田中校長は、異なる担当教科によるTTは教師の指導力向上にも役立つのではないかと期待を寄せている。

「本校の教師はほとんどが30代ですが、教師数が少ないために指導力を高める機会にあまり恵まれていませんでした。しかし、世代が同じでも、TTを組み、双方の指導法を肌で感じることで、指導力は向上できると考えています。教科横断的な知識を身に付けるこ

とは、普段の授業をする際の指導の幅にもつながるでしょう。文系・理系の枠にとらわれない、思いもよらない組み合わせの授業から、教科の魅力を再発見してほしいと思っています。生徒と教師双方の潜在的な能力を引き出す可能性を、異教科のTTは秘めていると思います」

生徒の学習意欲の喚起、学力の定着度に一定の効果을 上げている異教科のTTだが、指導案の作成や教師間の打ち合わせ、教材作成など事前の準備が必要となる。今後の課題は、準備にあまり時間をかけずに、通常の授業で「コラボ授業」を行うことだ。

「異教科のTTを本校の特色として定着させるためには、ノウハウを少しずつでも蓄積していくことが重要です。国語のこの単元では数学とTTを行うというように、時期や単元を決めて毎年実施すれば負担もそれほど大きくならないはず。指導案や教材を引き継ぎながら、そうしたノウハウを教科ごとに少しずつ増やしていき、TTを定着させたいと思います」(古閑先生)

「生徒の学習意欲の向上を学力につなげていくことも課題です。11年度入試では5年ぶりに国公立大合格者が出て、教師も生徒も意欲が高まっています。学校を元気にし、地域の期待に応えていきたいと思えます」(田中校長)

今回のテーマに関連する過去の記事はBenesse教育研究開発センターのウェブサイトでご覧いただけます。

2010年12月号指導変革の軌跡「岡山県立邑久高校」など

▶▶▶ <http://benesse.jp/berd/> → HOME > 情報誌ライブラリ(高校向け)